

# 温故知新

其の三

新天地を求めて朔北の大地開拓へ

## ツマゴとランプ



猿払村の漁業や農業は、今や、村を支える中心産業として活況を呈していますが、今日まで多くの困難を乗り越えてきた人々の努力を決して忘れてはならないと思います。入植から70余年の長い歴史は、簡単に語ることはできませんが、今回は、本州各地や戦後引揚による樺太からの入植について、当時の写真や日常生活用品を紹介します。記事は、「猿払村史」と、昭和59年に猿払村農業協同組合・猿払村ホルスタイン改良同志会によって刊行された、生乳生産2万メートル達成記念誌「岩高蘭」より引用いたしました。

村の農業開拓が本格化したのは戦後（昭和20年以降）ですが、大正時代の半ばに浅茅野台地や知来別で農業がはじめられました。林業が盛んだった浅茅野地区ですが、農業はまだ不安定で、荒地に火入れをし、菜種をまいて補助金をもらう生活であつたようです。当然、生活も厳しく、特に冬は大人も子どもも着物姿で、履物はツマゴ、ランプにたき火という状況でした。

## 同志たちへ

開拓者として荒涼とした猿払の原野に立ち、えん麦と馬鈴薯、人馬一体となった重労働の末、牧草と乳牛、農業機械の導入と、酪農の近代化がすすめられた昭和42年秋。戦後開拓20周年記念式の際の、当時の農協組合長である小尾光秋氏の挨拶の一部を抜粋し紹介します。

『入植以来20年。風雪に耐えて今日集つた開拓の同志は150戸。志ならずして離農した人々。病気や事故で死亡した人々。胸中を去来するものは20年の哀歎の情であります。

戦後の混乱の中から、ここ猿払の原野に第2の人生を確立しようと入植したものの、連年のように襲つてきた洪水に烟は洗い流され、山火に焼き出され、犠に家畜は奪い去られ、続発する冷害は混同農業を不可能にしました。

今日、ここに集まっている吾々を今まで支えてきたものはなにか。連年の災害から農業を放棄せしめなかつたもの、それぞれを3度、4度と努力の方向に導いたもの、それは我々自らの強い意志による努力といふよりも、その時々の行政の強い援助と経済効果さえも上回るほどの、国の農業に係る計画の変更と実施にあつた……。』



▲昭和28年頃 馬2頭引きによる畑起こし

国という大きな力への抵抗と諦めない努力が、その後の農業基盤整備や乳価の高騰、水道・電気・電話などのインフラ整備へつながり、成果をみに至りましたが、組合長の言葉からは、入植者の意志や固い糰、そして前へ進む強いリーダーシップを感じます。

## 戦後開拓の幕開け

「緊急開拓事業実施要領」の閣議決定を受けて

昭和20年11月、国は「終戦後の食糧事情及び復員に伴う新農村建設の要請に即応し、大規模な開墾、干拓及び土地改良事業を実施し、以て食糧の自給化を図ると共に、離職せる工員・軍人その他の者の帰農を促進せんとする」として、開墾面積などの目標を示したが、北海道は規模も小さく、スタート時点から問題を抱えていました。決して十分とは言えない条件と厳しい環境の中で入植者は開拓事業を進めざるを得ませんでした。

写真① 昭和32年頃の開拓農家の住宅  
② 昭和24年～25年頃の開拓農家の住  
地  
③ 昭和30年頃の開拓農道（豊里  
地区）  
④ 入植当時の開墾風景（笠  
刈り作業）



▲昭和30年頃 大水害（狩別地区牛乳台）

## 日常生活用品



次号では、資料展示公開に向けて準備を進めている、旧浜猿払小学校の様子について、紹介をします。

